

HISTORY OF BANEI RACEHORSE

～名馬のルーツを知ろう～

推し馬のおじいちゃんは何？ ひいおじいちゃんは何？ 3代、4代さかのぼると全くわからないことが多いばん馬たち。ばん馬の基礎を築いた品種と、現在の活躍馬のルーツとなる種雄馬を紹介します。

ばん馬とはどんな馬か？

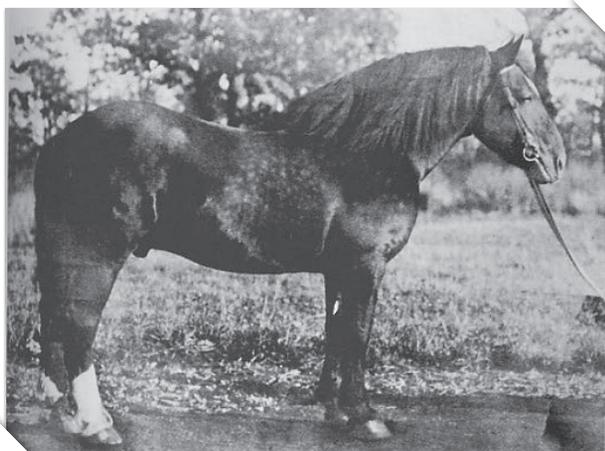
ばんえい競馬で走る馬、「ばん馬」はどんな馬か——現在ばんえい競馬に出走している馬は、もとは運搬や農林業で使役されていた重種といわれる大型馬です。ばんえい競馬黎明期の頃は、使役している馬を転用していました。

モータリゼーションが進み、ばんえい競馬が興行として盛んになると、重種馬は競馬に使うことを主な目的として生産されるようになりました。

ばん馬は主に3つの品種を元に改良を重ねられています。

- ・ベルシュロン種（フランス原産）
- ・ブルトン種（フランス原産）
- ・ベルジアン種（ベルギー原産で北米で改良）

他品種の導入を試した時期もありましたが、この3品種の混血が進み、平成15年以降「日本鞍系種」という新たな品種として扱われるようになりました。地方競馬情報サイトの馬情報で馬名の右側に記載されている（日鞍）とはこの「日本鞍系種」の略です。平成15年までばん馬に使われていた半血という名称は、現在は文字通り半分の血、純血種同士の交配による産駒に使われています。



ばん馬の祖ベルシュロン種のイレネー号。
サラブレッドでいうところの三大始祖のような存在

ばん馬の改良の歴史は、明治末期にベルシュロン種の導入からはじまりました。ばん馬の始祖と言われるイレネー号は明治43年に購入され、44年より供用開始。これはサラブレッドの導入とほぼ同時期です。また、第二次世界大戦前はベルシュロン種と並んで中間種と呼ばれるトロッター種やアングロノルマン種なども大いに輸入されていましたので、8～9代とさかのぼればトロッターやアングロノルマンの混じったばん馬もたくさんいます。とはいえ、サラブレッドなどの軽種馬を除く品種は、5代にわたって同一種を掛け合わせるとその品種として登録されます。また特徴もほぼ消えていくので、今のばん馬たちにトロッターやアングロノルマンの影響はほとんど見られません。

戦後、アングロノルマン、トロッターに代わって導入されたのがブルトン種です。生育が早く、肉付きが良く、温和で従順ということで、1950～60年代におもな輸入先であったフランスで最も普及していた重種です。生産頭数が多く、選べる馬の質も高かったので戦後さかんに輸入されました。ばん馬の早熟化、スピード化に寄与した品種です。

1970年代に入って、アメリカからベルジアン種が持ち込まれました。ベルジアン種は持ち込まれた種雄馬が大型で近親交配の強い馬だったので、その特質をよく産駒に伝えて大成功を収め現在に至ります。

この他、ばんえい競馬が盛んになると、クライスデール種、アルデンネ種など色々な品種の導入が試みられましたが、成功していません。

また戦前から一貫して重種改良の主流であり続けたベルシュロン種ですが、1970年代以降に輸入されたベルシュロン種には、事実上別品種の馬もいます。というのもベルシュロン種の原産国フランスでは地方品種の衰退が著しく、1960年代に品種の統合が行われていて、マイエンネ、ニヴェルネ、オジェロンという近いエリアの品種がベルシュロン種に吸収されているのです。この中のマイエンネは、大柄で日本人の求める条件に合っていたため、1970年代以降輸入された馬には、マイエンネ系のベルシュロンが多くいます。

少しこだわって言うと、ベルシュロン種、マイエンネ系ベルシュロン種、ブルトン種、ベルジアン種を幾重にも混ぜ合わせ作り上げられた馬が、現在私たちが帯広競馬場で応援しているばん馬のスタンダードです。



ベルシュロン種

ブルトン種

ベルジアン種